# 文化財をたずねて

No.5

『有年中学校周辺』の史跡めぐり

発行　赤穂市教育委員会
編集　生涯学習課文化財係
（赤穂市加里屋81　TEL3-6858）


## ①有年山城

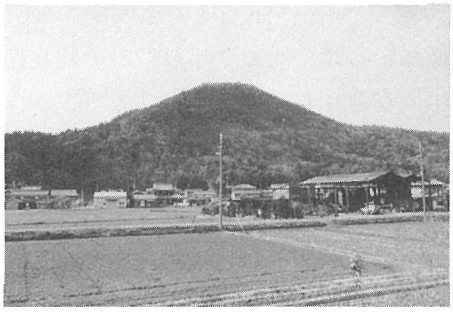
八幡神社裏の標高220mの山頂にあり、八幡山城・大鷹山城ともいう。現在も曲輪となる平坦地や土塁・堀などの痕跡が認められる。曲輪の配置は鍋子城と同じく鍵形梯郭式で、市内最大の規模を誇っている。『播磨鑑』や『播磨古城記』、『赤松家播備作城記』などの古書によれば、この地に最初に城を築いたのは赤松信濃守範資の三男本郷掃部介直頼で、貞和年間(1345～50)のことという。直頼のあとこの城に居城したのは富田右京である。富田右京は、有年山城の南に位置する鍋子城からこの城に移ったが、その後浦上宗景に攻められて滅ぼされたという。

## ②有年八幡神社

祭神は誉田別命（応神天皇）・帯中津日子命(仲哀天皇)・息長帯姫命（神功皇后)の三神である。その創立年代は不明であるものの、かつて上郡町山里にあった社殿が洪水で東有年に流れ着いたのをこの地に祀ったのが最初といわれる。現存する「八幡宮」の扁額は、弘法大師が唐からの帰途、この地に光明寺を建立した際に、その余材で奉納したものという。境内には武内宿弥命を祀る社をはじめ、水神社、荒神社３社、もと黒沢にあった須賀神社を合祀する。また拝殿には明治10年(1877)に法橋（北條)文信の画による東有年の町並み図の絵馬がある。さらに、神社の境内には「山の灯台」があり、かつて千種川を上下した高瀬船に便を与えた。このほか「さいじょうはん」と呼ばれる、くぼみのある大きな岩があり、弁慶の足跡といわれている。

## ③重ね荒神

八幡神社の山裾を山沿いに少し東に行くと、巨石を二つ重ねた祠があり、これを重ね荒神という。古道に面して祀られており塞の神、稲荷社などを祀っているという。重ね荒神のすぐ前の田は、もと舞台があったところで、舞台屋敷と呼ばれている。



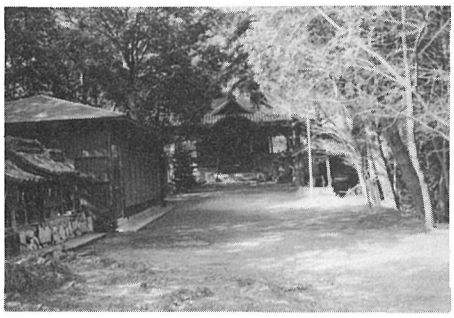
有年山城

## ④神田跡

有年八幡神社の神田は、かつては現在の国道２号線の付近にあり、２反３畝あったという。そこは清らかな湧水に恵まれ、周辺の田畑を潤した。国道の改修やほ場整備などで現在の位置に移され、神田も１坪ほどになり、畔のかたわらに宝篋印塔の笠の部分を祀っている。八幡神社祭礼の頭人行事として、毎年夏至の日にこの神田に神酒・豆・アラレを供え、田植えを行う。

## ⑤清水山浄泉寺

浄土真宗本願寺派に属し、現在は東有年山手にある。もとははりま台の背後にそびえる清水山にあったという。寺の創立は、大永２年(1522)に僧了専が清水山山頂に堂宇を建立したことに始まると伝えられ、以後長い間山頂にあったが、享保５年(1720)に東有年に下り、文化７年(1810)に現在の場所に移転した。



有年八幡神社

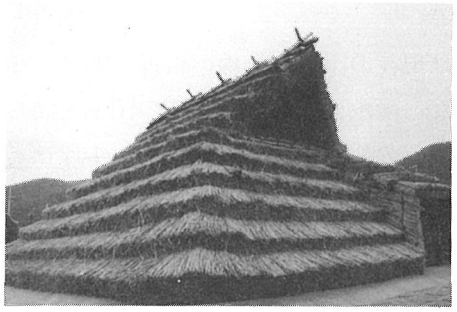
## ⑥片山薬師堂

片山の背後の山の中腹にあり、「承応３年(1654)法眼康智七条大仏師」と銘のある木造の薬師仏を祀る。堂の付近に清水があり、眼病・疣によく効いたという。また境内の片隅には五輪塔が数基祀られている。

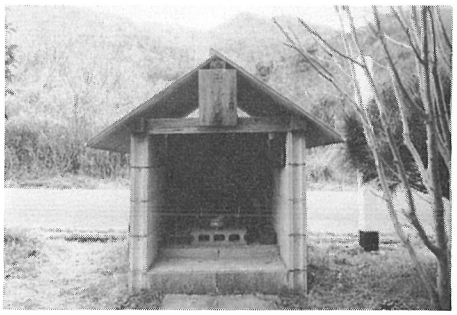
清水山浄泉寺

片山薬師堂

有年家長屋門



東有年・沖田遺跡公園



清水山登り口地蔵

**⑦有年家長屋門**

東有年の片山にある有年家は江戸時代には柳原家と同様に代々庄屋を務めた。現在の屋敷は明治以降のものであるが、２ｍほどの石垣の上に建つ長屋門は江戸時代後期に建てられたものという。

**⑧傍示ヶ鼻地蔵**

旧有年小学校跡地の西、細長く突出した尾根の先端付近を傍示ヶ鼻といい、東有年と西有年の境界地となっている。現在地蔵はこの尾根の先端東側の中腹にあるが、もとは旧国道坂折峠に祀られていたもので、別名「さかおれ峠の地蔵」とも呼ばれていた。高さ２ｍ余りの立像である。当時交通の難所であった坂折峠の安全を願って、時の庄屋であった有年良左衛門が施主となり天保８年(1837)に建立された。その後、国道も現在の位置に変わり、峠を往来する人も減ってきたので、現在の位置に移された。

**⑨東有年・沖田遺跡公園**

東有年・沖田遺跡は、平成元年(1989)～平成４年(1992)までほ場整備事業に伴い発掘調査が行われ、縄文時代後期(3,500年前頃)から室町時代(600年前頃)にかけての建物跡などが多数見つかった。特に遺跡公園となっている部分では、弥生時代後期(1,800年前頃)の竪穴住居跡７棟と、古墳時代後期(1,450年前頃)の竪穴住居跡22棟および高床倉庫跡１棟などが密集して検出された。また住居跡からは土器など当時の生活の道具が多数出土したが、とりわけ古墳時代のものとしては全国的にも珍しい土馬が見つかっている。このように弥生時代や古墳時代のムラの成り立ちや、生活の様子を考えるうえで貴重な遺跡であることから、平成４年(1992)３月に兵庫県指定文化財となった。遺跡は遺跡公園のあるところだけでなく、極めて広い範囲にわたり、他の地区でも様々な時代の住居跡や古墳などが現在の近代的な田の下に眠っている。

**⑩清水山登り口地蔵**

上菅生から清水山への登り口にあり、現在の住宅地の造成中に発見された。高さ55㎝の花崗岩に地蔵像が彫られ、明和９年(1772)の建立銘がある。現在ははりま台の公園の中に安置されている。

**⑪清水峠地蔵**

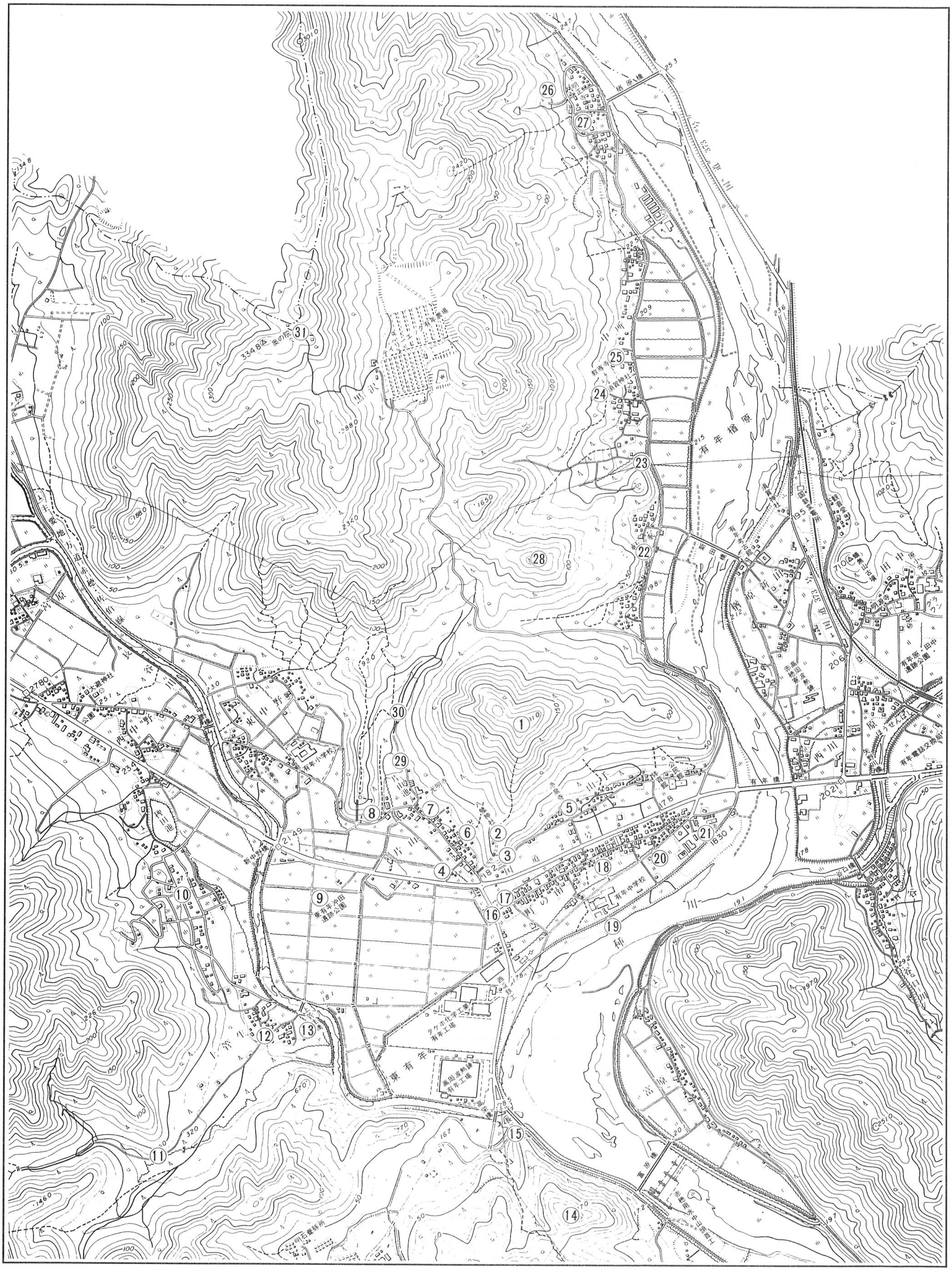
上菅生から横山へ抜ける道の頂上にある高さ70㎝の自然石の立像である。光背には「天保９(1838)戌年六月　世話人谷中」と刻まれている。

**⑫大山登り口の地蔵**

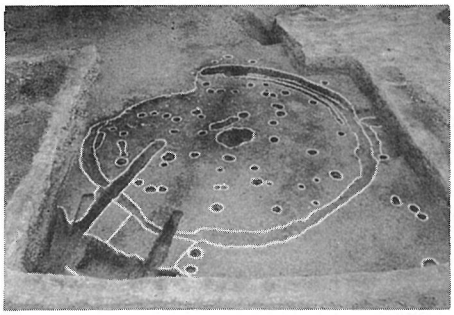
上菅生から西有年へ越す峠の入り口にあって、大山峠方面へ行く人々や山仕事へ行く村の人の安全を祈願して建立されたものであろう。高さ50㎝と70㎝の二体の地蔵で、ともに座像である。その建立年代は不明であるが江戸時代のものと推定される。

**⑬上菅生遺跡**

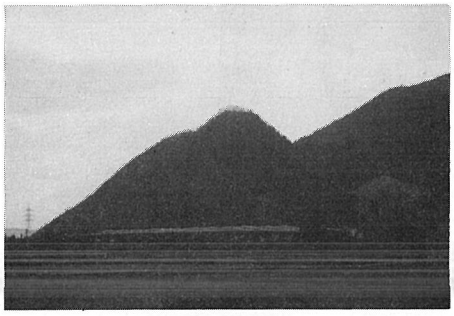
上菅生遺跡は、清水山の南東山裾に位置し、山からの土砂堆積によって形成された扇状地と長谷川の氾濫原上に立地する。弥生時代後期(約1,800年前)の竪穴住居跡や柱穴跡などが検出されたことから集落跡と考えられ、長谷川をはさんで対岸の東有年・沖田遺跡との関係が注目される。竪穴住居跡からは、弥生土器以外に柱状片刃石斧や鉄鏃などが出土



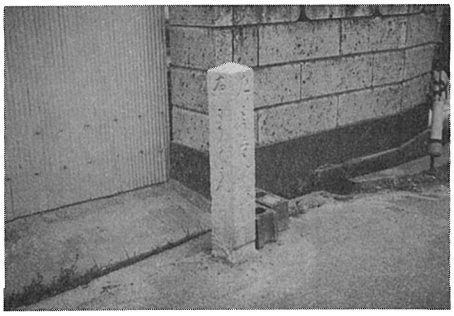

①有年山城②有年八幡神社③重ね荒神④神田跡⑤清水山浄泉寺⑥片山薬師堂⑦有年家長屋門⑧傍示ヶ鼻地蔵⑨東有年・沖田遺跡公園⑩清水山登り口地蔵⑪清水峠地蔵⑫大山登り口の地蔵⑬上菅生遺跡⑭鍋子城⑮不動山石仏⑯道標⑰有年宿番所跡⑱有年宿本陣跡⑲波止・船着き場跡⑳赤穂市埋蔵文化財調査事務所㉑有年八幡神社お旅所㉒小河先生の墓・雲龍堂跡㉓地蔵立像板碑㉔中所の須賀神社㉕精谷山教専寺㉖野田古墳群・野田遺跡㉗野田の須賀神社㉘後藤陣山城㉙寺山地蔵㉚寺山道標㉛黒沢山光明寺



上菅生遺跡

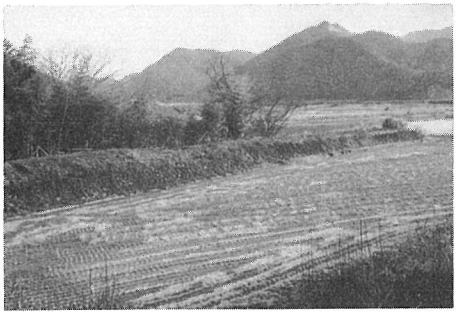


鍋子城



道　標

有年宿番所跡（旧松下邸跡）



波止・船着き場跡

している。また、縄文時代後期（約4,000年前）の土器を包含した層が確認されており、周辺に当時の生活の営みがあったことが推測される。

**⑭鍋子城**

東有年と中山の境、標高147ｍの急峻な山頂にあり、別名を大鷹山城・谷口城・中山城ともいう。『播磨鑑』によれば、最初の城主は岡豊前守と呼ばれた土豪であるらしい。その後赤松秀光の三男小河丹後守秀春や富田右京などが居城したという。城跡には、鍵形梯郭式に配置された曲輪の跡が残り、室町時代と思われる瓦片も見つかっている。また、城跡のやや下方の岩盤には湧水があり、現在これを霊水とし「大龍権現」が祀られている。

**⑮不動山石仏**

千種川と長谷川の合流点、ここを不動ヶ淵といい、かつては交通の難所であった。迫るような断崖絶壁の岩陰に高さ30㎝の不動明王が祀られている。もとはこの崖下にあったが、道が付け替えられたので、現在の位置に祀るようになった。しかし近年落盤があり、石仏は黒沢山光明寺に移されている。

**⑯道標**

旧国道沿いに東有年集落を西に出たところにある。現在の道に面して「左　王うく王ん　すぐあかほ城下道三り」、側面に「王うく王ん」と刻む。「王うく王ん」とは往還のことで、街道の意味。つまり、左へ行けば赤穂城下まで３里、右へ行けば西国街道という意味である。

**⑰有年宿番所跡（旧松下邸跡）**

有年宿番所跡は東有年の西端近くに位置し、藩役人が通行人を取り調べていた番所で、内部は藩役人が使用する３部屋（上段の間、中間の間、玄関の間）と家主が日常生活する場所が設けられていた。平成４年(1992)に解体され、現在は跡地に標柱が残る。

**⑱有年宿本陣跡（旧柳原邸跡）**

近世の西国街道の要地にあった有年宿は西播磨地方最大の宿場町として栄え、参勤交代で上京する大名の宿泊施設として町の中央には本陣が置かれた。東有年の宿場の本陣は柳原家があたった。その敷地は約1,000坪、総畳数300枚を数え、正面には長屋門、その西隣には長屋と土蔵が建てられ、周囲は下段を石組みにした土壁が巡っていたという。現在は民家が立ち並び、かつての本陣は失われているが、その一部は尾崎に移転され残されている。かつては本陣に続いて脇本陣のほか旅籠屋が数10軒並んでいた。

**⑲波止・船着き場跡**

現在の有年中学校の南、千種川のほとりに大小２箇所の波止がある。大きい方を大バト、小さい方を小バトと呼ぶ。かつては千種川を行き来する高瀬舟が発着した。また、波止と言う名の通り千種川の水流を逃がし堤防を保護する施設でもあった。明治以降に堤防が改修された時、波止にも手が加えられ、現在大バトは間知積みした堅固な石垣で作られ今も見ることができるが、小バトは土砂に埋もれている。

**⑳赤穂市埋蔵文化財調査事務所（有年公民館分館）**

もとは有年公民館であったが、公民館の新築・移転に伴い平成４年

(1992)から赤穂市埋蔵文化財調査事務所として使用されている。ここでは赤穂市教育委員会が、有年地区周辺で実施した発掘調査の出土遺物の整理・復元、保存処理、調査研究を行っているほか、主な遺物を一般に展示公開している。開館は原則として月曜日から金曜日、入館時間は午前9時から午後4時30分までとなっている。入館は無料。問い合せは、同事務所（TEL07914-9-3691）もしくは、赤穂市教育委員会生涯学習課文化財係（TEL07914-3-6858）まで。

赤穂市埋蔵文化財調査事務所

**㉑有年八幡神社お旅所**

有年保育所の西側にあり、その昔上郡町山里にあった八幡神社の社殿が洪水で流され、ここにかつてあった松の木の大木に流れ着き、これを現在の場所に祀ったという有年八幡神社創立の伝承の地である。現在は有年八幡神社のお旅所となっている。

有年八幡神社お旅所

**㉒小河先生の墓**

小河孫右衛門は本名を秀臣といい、幼時から原村（現在の有年原）の寺子屋素行堂で大島長直先生に学んだ。17歳になる天保6年(1835)に楢原に雲龍堂と称して寺子屋を創立し読書・習字などを教えた。門人は有年を中心に上郡・相生から岡山県にまでおよび、最盛期にはその数200人以上に達したという。墓石には「小河先生墓」との題字があり、先生を称えた碑文と歌3首が刻まれている。台座にはこれを建立した門人達の名前が多数刻まれ、往時の寺子屋の隆盛がうかがわれる。

小河先生の墓

**㉓地蔵立像板碑（はえぬき地蔵）**

高さ170cm、幅134cmの花崗岩を船形に彫りくぼめて光背とし、その中に菩薩像を半肉に彫りだしている。菩薩像は手に錫杖と宝珠をもち、蓮花座の上に立つ。像の左右には地蔵菩薩本願経から引用された銘文が彫られ、延文3年(1358)の紀年銘が見える。市内の中世石仏としては最大かつ唯一の紀年銘をもつもので、昭和62年(1987)3月に兵庫県指定文化財となっている。また、石仏の彫られた石が地中からはえ出たように見えることから「はえぬき地蔵」あるいは、虫歯が痛む時この地蔵に煎り大豆を供えて祈れば虫歯が抜けて痛みがおさまるということから「歯抜き地蔵」と呼ばれて親しまれている。

地蔵立像板碑

**㉔中所の須賀（荒）神社**

須佐男命と天照大神を合祀する。また、背後の山塊には古墳時代後期の横穴式石室墳7基から構成される中所古墳群が存在する。

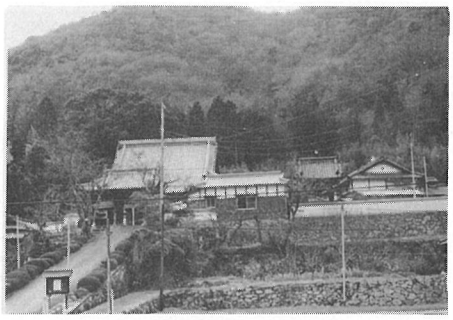
**㉕精谷山教専寺**

浄土真宗本願寺派に属し、その創建は赤松則村の家臣、志水権太夫重近の孫源之進が出家し、本願寺八世の蓮如上人に帰依、法名を祐教と号し、当山を開基したという。寺紋の丸に二引は足利氏の紋であるが、赤松氏もこれを用いた。寺にはこの紋の入った冑・鎧・鞍が残されているほか、宝物として源之進が永享2年(1430)に譲り受けたという十字名号一幅を蔵している。これは蓮如上人16歳の時の書であると伝えられる。

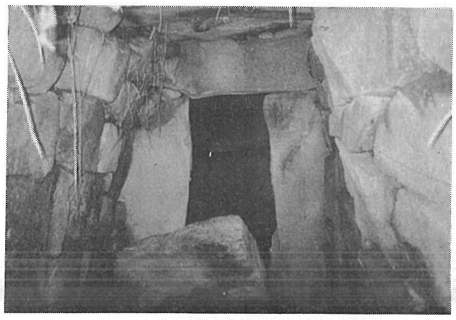
中所の須賀（荒）神社

**㉖野田古墳群・野田遺跡**

野田集落の背後の山麓一帯に存在する古墳群で、竪穴式石室を持つ前期古墳と、横穴式石室や箱式石棺を持つ後期古墳がある。なかでも「祇園塚」とも呼ばれる2号墳は、その特異な横穴式石室の構造が注目され



精谷山教専寺



野田２号墳

野田の須賀（荒）神社

黒沢山光明寺

る。全長7.8ｍを測る石室は、玄室入り口に玄門を持ち、これを塞ぐための板石が残っている。さらに羨道にも入り口付近に板石を立てて仕切りを設けている。出土遺物からその築造は６世紀後半と推定される。昭和61年(1986)３月に兵庫県指定文化財となっている。また、野田の集落から背後の山裾にかけては、弥生時代中期の大規模な集落遺跡である野田遺跡が広がっている。野田遺跡ではこれまで多数の遺物が採集されており、その多くは現在有年考古館に展示されている。

**㉗野田の須賀（荒）神社**

祭神は須佐男命と倉稲魂命である。境内には梵字を刻んだ五輪塔の地輪がある。また、須賀神社の下方には明正寺がある。

**㉘後藤陣山城**

有年楢原の三軒家集落の背後、標高150ｍの山頂にある。一部に石垣を備えた広い曲輪が東西に並び、これを帯曲輪が２段に巡っている。城主は『赤穂郡誌』によれば後藤某と伝えられえるのみで、詳しいことはわからない。また、三軒家には薬師堂がある。

**㉙寺山地蔵**

片山から光明寺への参道、奥池の堤にある。高さ50㎝ほどの石像で、表に「理覚宗純　本覚知純」、裏に「元屋長次良父」の銘がある。

**㉚寺山道標**

寺山地蔵からやや登り、楢原と黒沢への分岐点に高さ1.2ｍほどの道標がある。「右　ならはら　左　くろさわ」と刻む。また、さらに片山から三軒家への峠の頂上付近にも「右　くろさは　左　うね」と刻まれた道標がある。

**㉛黒沢山光明寺**

東有年片山背後の標高332ｍの黒沢山山頂にあり、真言宗高野派に属する。寺伝によれば、寺の創建は大同元年(806)に弘法大師が唐から帰京の途、この地に一寺を建立したことに始まるという。南北朝時代に書かれた『峰相記』には光明寺の名が見え、すでに播磨でも有力な寺院であったことがわかる。当時は山頂一帯には多くの堂宇や僧坊が存在したが、永禄年間(1558～1569)の初め頃に尼子晴久の乱により焼き討ちにあい焼失したという。以後江戸初期に姫路藩池田輝政に田畑の寄進を受けいくつかの建物が再建されたが、文化３年(1806)に現在の東有年片山に移った。現在は大師堂・鐘楼堂が再建され信仰を集めている。また、平成元年(1989)から部分的な発掘調査が行われ、塔跡・僧坊跡などの遺構が見つかっている。

（調査協力）井上益雄、宮下　斉、故 平田一二、沼田　覚、松田里司、横山博光、中山茂雄、池本芳文